修士論文（要旨）
2015 年 7 月

英語名詞の可算性についての一考察
- 認知言語学の観点から -

指導　山岡　洋　教授

言語教育研究科
英語教育専攻
213J3953
朱　彬

Master's Thesis (Abstract)
July 2015

A Study on Countability in English Nouns: From the Viewpoint of Cognitive Linguistics

Bin Zhu
213J3953
Master's Program in English Language Education
Graduate School of Language Education
J.F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hiroshi Yamaoka

目次

序論 1

第 1 章　先行研究 3
　1.1　伝統文法における名詞の可算性 3
　1.2　Langacker (1991)の Count / Mass Nouns 3
第 2 章　分析枠組み 5
　2.1　有界性（bounding） 6
　2.2　均質性（homogeneity） 6
　2.3　収縮性（contractibility） 6
　2.4　反復性（replicability） 7
第 3 章　名詞の分類とその可算性 8
　3.1　ペア名詞 8
　　3.1.1　ペア名詞一体型 8
　　3.1.2　ペア名詞分散型 9
　　3.1.3　ペア名詞分析 10
　3.2　群名詞 11
　　3.2.1　一般群名詞 12
　　3.2.2　複数呼応群名詞 14
　　3.2.3　単数呼応不可算群名詞 17
　　3.2.4　単複同形群名詞 19
　3.3　抽象名詞 20
　3.4　物質名詞 25
　3.5　典型名詞 27
　3.6　固有名詞 28
　3.7　名詞の可算性の転換 30
第 4 章　日・中・英の比較 35
第 5 章　結論 37

参考文献

謝辞

要旨

英語名詞では，普通名詞（Common Noun），集合名詞（Collective Noun），物質名詞(Material Noun)，抽象名詞（Abstract Noun），固有名詞（Proper Noun)の 5 種類に分けられている。また，数の概念により，名詞が可算名詞(Countable Noun)と不可算名詞(Uncountable Noun)に分けられる。しかし，場合によって，同じ名詞が可算だったり，不可算だったりすることもある。

(1) a. I drink <u>wine</u> when I'm thirsty.（僕は喉が渇いたらワインを飲む）.
b. John bought three different <u>wines</u>.（ジョンは三種類のワインを買った）
（高橋（1998: 31))

例(1a)の wine は物質名詞としての不可算名詞だが，(1b)の wine は種類を表しているため，可算名詞になっている。伝統文法では，このような文法的振舞いを充分に説明できていないところが存在している。

(2) 可算名詞と非可算名詞の区別や単数と複数の区別には, 母語話者の物事の捉え方や認識の仕方および心理的な要素が深く関わっている。（小池（2009: 111))

このため, 本稿では Langacker (1991)が主張する認知文法における名詞の可算性の四つの要因（有界性（bounding)，均質性（homogeneity)，収縮性（contractibility)，反復性(replicability))を判断基準とし，さらに，認知言語学の理論を用い，英語名詞の可算性の振舞いを解明しようとする（第 1 章)。

第 2 章では Langacker (1991)による，認知文法の四つの要因をそれぞれ説明した。

第 3 章では，人間が物事についての認知の仕方により，英語名詞の新たな分類基準を立ててみた。数のカテゴリーから典型名詞，ペア名詞，群名詞と名前付けて分類し，形態，性質のカテゴリーから抽象名詞，物質名詞，固有名詞に分類した。そして，認知言語学の枠でこの六種類の名詞の可算性とその原因をそれぞれ分析し，認知文法の四つの要因を用い，分析結果と比較しながら，英語名詞の可算性の振舞いを探求した。

第 4 章では日本語，中国語，英語母語話者の言語についての認識の比較を行い，「人間が共通して持つ言語」という普遍論の立場から英語名詞の可算性を分析した。

分析結果として，典型名詞では最もティピカルな用法を持っている。ペア名詞の下には「一体型ペア名詞」と「分散型ペア名詞」があり，一体型は常に複数扱いされることに対し，分散型は複数扱いでもでき，片方の場合では，単数扱いでもできる。そして，群名詞の下には，「一般群名詞」，「複数呼応群名詞」，「単数呼応不可算群名詞」，「単複同形群名詞」という四種類に分類してみた。一般群名詞では単数，複数両方扱いできる（family, team, audience など)。複

数呼応群名詞では単語自体に複数の概念が含まれるため，語末に{s}をつけたり，a (an)と共起したりすることができない (police, cattle など)。単数呼応不可算群名詞では不可算名詞と同様な文法振る舞いをし，{piece}を用いて量を表す (furniture, baggage など)。また，単複同形群名詞は名前の通り，数の多少により単語自体に変化が起こらない (sheep, Japanese など)。抽象名詞，物質名詞，固有名詞には明確的な境界線が存在していないため，不可算的な用法が普通だが，場合によって，可算になることもある。そして，これらの名詞が可算化する時には，最も重要な判断基準は有界性だと論じた。

【参考文献】

Biber, Conrad and Leech, G. (2002) *Student Grammar of Spoken and Written English*, CUP, Cambridge.

Carlson, Gergory N. (1980) *Reference to Kinds in English*, Garland Publishing, NY.

Chesterman, Andrew (1991) *On Definiteness*, CUP, UK.

Cho, K. and Kawase, Y. (2011) "Effects of a Cognitive Linguistic Approach to Teaching Countable and Uncountable English Nouns to Japanese Learners of English," *annual review of English language education in Japan*, 22, 201-215.

Evans, Vyvyan (2007) *A Glossary of Cognitive Linguistics*, University of Utah Press, Salt Lake City.

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 (改訂三版), 金子書房, 東京.

Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*, CUP, UK.

小池一夫 (2009) 『英語語彙の意味構造』 日本英語言語学研究推進会, 東京.

小池一夫 (2011) 「数の観点から捉えた英語名詞の性質」『言語文化研究』2.

久野暲・高見健一 (2004) 『謎解きの英文法　単数か複数か』くろしお出版社, 東京.

Langacker, R. W. (1991) *Concept, Image, and Symbol, The cognitive Basis of Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin・New York.

Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol 2. SUP Stanford, California.

Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar, A Basic Introduction*, OUP, Oxford.

Leech, Geoffrey. (1989) *An A-Z of English Grammar and Usage*, Edward, London. .

岡本順治 (2000) 「認知言語学の潮流: 背景と展開」『ドイツ文學』 (104), 1-17, 日本独文学会.

奥津文夫 (2002) 『日英比較英単語発想事典』三修社, 東京.

Quick Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Cvartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Sinclaie, John ed. (2001) *Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners, Third Edition*, Glasgow, HCP, USA.

Spears, Richard A. (1997) *NTC's Guide to Grammar Terms*, NPC, Lincolnwood.

高橋順子 (1998) 「英語における名詞の可算性・不可算性に関する一考察」『湘南国際女子短期大学紀要』 5, 31－44.

Thomson, A. J. and A. V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar*, 4th ed., Oxford University Press, Oxford.

Ungerer, F. and Schmid, H. J. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*, Longman, London.

Ungerer, F. and Schmid, H. J. (1998)『認知言語学入門』 池上嘉彦 訳, 大修館, 東京.

綿貫陽 and マーク・ピーターセン（2011）『表現のための実践ロイヤル英文法』 旺文社，東京.

Wierzbicka. A. (1988) *The Semantics of Grammar*, JBPC, Amsterdam.

山岡洋（2014）『新英文法概説』 開拓社，東京.

山岡洋（2004）「品詞分類再考」『英語学・英語教育研究』（日本英語教育学会）9（23），17－30, .

安井稔（1982）『英文法総覧』 開拓社，東京.